鉛魂
森野Ｖｅｒ．Ｉ

森野イブキ

初めの一歩が肝心

いつもの、『万事屋鉛ちゃん』にて。

板田鉛時「なんだあー、ここは？　アニメでもないし、ギャラは出るんだろーなあ？」
榊楽「そうアルね！　ギャラが出ないなら、わたしら、とっとと帰るネ！」

開始早々、やる気のない二人。

詩村古八「ちょっと、二人とも！　待った、待った！　ここ、一応はアンソロジーみたいですよ。原作やアニメの宣伝くらいにはなるんじゃないですかね」
鉛時「はあ？　古八君、何を急にやる気出しちゃてんの？　ああ、これだから本編では目立たない眼鏡君には困ったもんだ」
榊楽「そうネ！　古八！　いくらお前が地味キャラだからって、こんなところで目立とうなんて、プライドはないのか、アルね！」
二人とも、容赦のない突っ込み。本来は、突っ込みは古八の役なわけだが・・・・・・。
古八「もういいですよ！　死んだ魚の目をしたやる気のない主人公に、アニメ史上初のゲロを吐くヒロインの二人に言った僕が馬鹿でしたよ！」
古八、むくれてふて寝をする。仕方なく鉛時は起き上がると、鼻をほじる。
鉛時「あのなあ、古八。ギャラも出ないところで、俺らがいくら頑張ったって意味ないよ？　それによー。ここだって、どーせ誰も読んじゃあいないっての。わかったら、いつもの突っ込みを復活させろや」
榊楽「鉛ちゃん！　その時は、”復活の呪文”ね！」
鉛時「ああ、榊楽。いい事に気づいたな。ええと、古八をよみがえらせる、復活の呪
文は・・・・・・」
二人のアホな会話に古八、むくりと起き上がる。
古八「あの、僕は死んでませんから！　それに復活の呪文って、あの初期の〇〇〇〇じゃないですか！」
ビシ！　と古八の突っ込みが決まる。
鉛時「おお、古八がよみがえったぞ。やっぱり、復活の呪文が効いたか！」
榊楽「すごいネ！　やっぱ、〇〇〇〇は人気作品だけアルね！」
アホアホコンビのコンボに、しばし固まる古八。

古八「だから、初期の〇〇〇〇は関係ないでしょー！　それに、復活の呪文も唱えてもいないし！！」
一人、熱くなる古八だった。（ナレーション：板田鉛時）

古八「結局、最初から僕が落ちかよ、ちくしょー！！」

テレビカメラの前でピースしているのは田舎者（改）

「ご用あらためである！！」
そう言って万事屋に入って来たのは、真鮮組のスリートップである。
板田鉛時「あ、今日は休みだから。とっとと帰った、帰った！」
と、鉛時は、鼻くそをほじっている。
榊楽「遊びに来たのなら、菓子折りのひとつでも、持ってくるアル！」
詩村古八「あれ？　鉛さん。もうここに来てる事は、突っ込まないんですか？」
鉛時「古八君～。俺も大人だよ～？　いつまでも、そんな細かい事にいちいち構ってられるかってーの。なあ、榊楽？」
主人公、板田鉛時。格好よく、榊楽に話をふる。
榊楽「そうアル！　わたしら、ギャラだけもらえれば、何も文句ないアルよ！」
鉛時「そうそう。ギャラ、だけありゃー文句は言わねーよ」
古八「って、結局、お前らギャラにこだわってんじゃねーかよ！」

完全に無視されている、真鮮組。

士方九四郎「おい！　何、無視してんだよ、てめーら！」
起田総合「ダンナ。うちの副長、気が短いって知ってますよねー。ちょいと話、聞いてもらえませんかねえー？」
近同功「ところで今日は、お紗さんは来ていないのかなあー？　我が弟よ！」
局長の近同だけ、まったく違うベクトルに話が向いているのは、気のせいか。
古八「誰が弟ですか！　姉上なら、来てませんよ。・・・・・・それで、話って、なんなんですか？」
起田「いや何、攘夷志士の葛小多郎がここに来たって、情報がありましてねえ」
士方「てめーら、隠してるとためにならねーぞ！」
鉛時「・・・・・・」
士方「何か言えよ、こら！」
榊楽「・・・・・・」
古八「・・・・・・」
すっかり、だんまりを決め込む万事屋。
士方「お前ら、全員・・・・・・刀のさびにしてやってもいいんだぜ？」
瞳孔が開き気味の、鬼の副長が刀のつかに手をやる。
鉛時「・・・・・・たくよう。出来もしねーのに、大層な口をたたくんじゃねえよ」
士方「こ、このヤロー！！」
近同「待て、トシ！　・・・・・・俺たちは、ただ葛の手掛かりが欲しいだけだ。ちょっと協力してもらえないだろうか？」

鬼の副長の目が座っている。
士方「近同さん。こいつらに、甘い言葉なんて必要ないですよ」
鉛時は相変わらず、鼻をほじっている。榊楽はテレビに夢中。万事屋で一番の常識人で、突っ込み担当（メガネ）が、ようやく応答する。
古八「葛さんは、ここには来ていないです。これでいいですか？」
起田「しかしねー、こっちには目撃情報があるんでさあ」
鉛時「そいつ、すげー近眼だったんじゃねえの？」
板田鉛時・・・・・・まるで緊張感のない、主人公である。
榊楽「あ！　ズラの事アルか？」
近同「そう！　それだよ、それ！」
頭をかく、鉛時。
鉛時「榊楽！　依頼人の事は秘密だってあれほど・・・・・・」
榊楽「こいつら、しつこいアル！　ヅラごとき、どうでもいいアル！」
このやり取りを聞いて、殺気立つ土方。
士方「てめーら、やっぱり隠してやがったな。あとで、署に来てもらうぜ」
ニヤリと笑う、鬼の副長。
榊楽「ズラなら、さっき来ていたアル。吉原の方に向かったアルよ」
鉛時「おい、榊楽！　依頼人の事をペラペラしゃべるんじゃねーよ。うちは信用第一なんだから」
古八「初めて聞きましたよ、そんな話」
万事屋がいつものグダグダ話になっていると、真鮮組は情報を得て気合が入る。
近同「吉原方面か。おい、トシ！　総合！　行くぞ！！」
あわてて万事屋を後にする、スリートップ。
榊楽「鉛ちゃん、まずかったアルか？」
鉛時「まあ、いいだろー。それにヅラなら問題ないだろ」
古八「いいんですかね、これで」

一方、真鮮組は、吉原の入口付近で葛らしき男の後ろ姿を発見した。
士方「葛、見つけたぞ！　今日こそはお縄についてもらうぜ！」
真っ先に起田が葛の長髪をつかみにかかる。彼はドＳなのである。
起田「葛、観念しやがれ！　・・・・・・って、ありゃ？」
葛の長髪があっさりと、つるりと取れてしまった。ツルピカの男が振り向く。
士方「・・・・・・」
近同「・・・・・・」
起田「こいつは・・・・・・ヅラですぜい」
近同「確かに、ズラだな」
士方「・・・・・・総合。そいつにヅラ、返してやんな」

そう言って、土方はタバコに火をつける。
起田「へい。ほらよ！」
起田がハゲの男にズラを投げ返す。
ヅラ男「な、何するんですかあー！　せっかく、万事屋さんにいいカツラの店を紹介してもらったのにー！」
ここで鬼の副長がキレた。
土方「てめーの後ろ姿が桂そっくりなんだよ。バカヤローー！！」
怒りのあまり、土方に足げにされるヅラ男。
起田「あーあ、素人さんに手をだしちゃダメですぜい。切腹もんだな、こりゃ」
ニヤリとする、起田。
土方「手は出してないぜ！　足だ、足！　誰がこん位で切腹するか！このドＳ野郎が！」
沖田「土方さん、あんたには言われたくねーですぜい」

一連の騒動に、真鮮組に対する町人たちの視線が痛い。

近同「いや、ズラ男さん！　人違いしてすみませんでした！　ほら、トシ！　総合！　行くぞ！」
早々と立ち去る、真選組。
ハゲ男は立ち上がると、素早くカツラを装着する。
ヅラ男「だ、誰がズラだあー！！　こ、これが本当の俺だあー！！」

男は吉原中に響き渡る声で、”魂の声”を叫んだのだった。

ヒロインは作品の花（改）

板田鉛時「また、ギャラ出ない所に来ちまったなあ」
榊楽「どうしてくれるアル、古八！」
詩村古八「榊楽ちゃん。それって、僕のせいじゃないですよね！」

そこに来客が。
詩村紗「こんにちは。相変わらず、暇そうねー」
鉛時「ほっとけ。・・・・・・ん？　何だ、後ろにぞろぞろ引き連れているのは？」
紗「さっき、そこで偶然ばったりあったから。ウフフ・・・」
古八（姉上、嘘臭いですよ！）
鉛時「で、今日は何のようだよ？」
紗「鉛さん。ぶっちゃけて言いますけど、『鉛魂』のヒロインのグッズ・・・・・・全然出ていないと思いません？」
鉛時「・・・・・・ああ？　そうだっけか？」（鼻くそをほじりながら）
榊楽「姉御！　ワタシのグッズはたくさん出ているアルネ！」
紗、顔をヒクヒクさせながら。
紗「ああ、榊楽ちゃんはいいのよ。お子様だから。問題は私たち。ねえ、八ちゃん？」
柳牛八兵衛「僕はお紗ちゃんのグッズだけあれば、それでいいんだ」
猿落あやむ「私は鉛さんとのツーショットのグッズを希望するわ！　何故なら鉛さんと私は、、赤い糸でむすばれているから！」
鉛時「あ、妄想ストーカー女はスルーな」
あやむ「鉛さんたら！　ああ、放置プレーなのね！」（胸キュン！）
古八「さっちゃんさん、相変わらずドMですね。・・・・・・あれ？　月読さんも一緒なんですか？」
月読「成り行きでな。わっちは、グッズなど別に気にしてないでありんす」
あやむ「何、かまととぶってんのよ！人気投票での順位が私よりも上だからって！　とにかく、鉛さんは誰にも渡さないわよ！」
紗「いらないわよ、こんな芋侍」（ニコッ）
月読「わっちは、その・・・・・・そんなつもりはないでありんす」（少し赤くなる）
榊楽「あ、ツッキーが赤くなってるアル！」
月読「そ、その呼び方は恥ずかしいから、やめてくれぬか？」
あやむ「鉛さんは、私だけのものよ！」
紗「はいはい！　主人公は意見ないそうだから、後はスポンサーの方ね？」（クスリと笑う）
鉛時「ああ？俺、何も言ってないんですけどー？」
紗「鉛さん、ないわよね？」（黒いオーラを漂わせて）
鉛時「・・・ないです」

古八「姉上、スポンサーに手を出しちゃダメですよ！　アニメ『鉛魂』完全に終わっちゃいますからね！」
紗「そう？　残念だわ。じゃ、制作会社の方に行ってみようかしら？」
古八「制作会社さんには、アニメでお世話になってるじゃないですか。キャラグッズと関係ありませんよ、姉上！」
紗「そう？　残念だわ。じゃ、代わりに原作者のゴリラのところにでもいこうかしら？」
古八「姉上、まさか・・・・・・」
紗「安心して、古ちゃん。ちょっとだけ、シメテくるだけだから」（笑）
古八（姉上、殺る気まんまんだよ！）
八兵衛「お紗ちゃん、僕も行こう」
あやむ「私も行くわよ！　愛ゆえに！」
原作者（ゴリラ＝空地英明）の元に向かう三人。

古八「あれ？　月読さんは、行かないんですか？」
月読「わっちは、たまたま一緒になって来ただけでありんすから。グッズにも興味があるわけでもなし。では、これで失礼するでありんす」
榊楽「ツッキー！　また、鉛ちゃんに会いたくなったら、いつでも来るといいアル！」
月読「なっ！？　そ、それは・・・・・・！？」
赤くなり、走り去る月読。

古八「ああ見えて、月読さん純情なんですね。ねえ、鉛さん？」
榊楽「あ、鉛ちゃん、寝てるアル！　オマケによだれ垂れてるアルよ！」
古八「主人公にあるまじき姿ですね。で、今回の落ち、どうするんですか！！」
鉛時「ＺＺＺ・・・・・・ズルズル！！」

（ズルズルで終わる！）　で、マジでヒロイングッズって、榊楽以外はほとんどないのネ。　やっぱり、腐女子（失礼！）さんたちの需要の方が大事なのだろうネ！？

さよならは終わりじゃない・・・ハズ

板田鉛時「はい、今月で『鉛魂』アニメ終了でーす！」
詩村古八「何、大事な事をさらっと言ってるんですか！　一大事じゃないですか！」
榊楽「そうネ！　わたしら声優の飯のタネ、どうしてくれるアルか！」
かつて、”白夜叉”として攘夷志士として怖れられた姿はどこにもない。テンパーの鉛時は、相変わらず死んだ魚の目をしたまま、鼻をほじる。
鉛時「だってよー、アニメ再開した時から、原作たまってなかったんだから、こうなるのわかってただろう？　おまえらだってよー」
まるで他人事のように言う、鉛時。
古八「でも、鉛さん。アニメですからね。ほら、ドラゴン〇ールみたいに、引き延ばそうと思えばいくらでも出来るじゃないですか！」
榊楽「そうネ！声優は生活かかってるネ！　アニメ続けろ、このヤロー！！」
鉛時「あのー、榊楽さん。中の人の本音が全開なんですけどー？　それになあ、俺だっておんなじ気持ちだよ。お前らの気持ちはよーく分かるからー」(苦笑）
なぜか、余裕の鉛時。
榊楽「分かったアル！　鉛ちゃん、中の人が『スケッド・タンス』に出てるからそんなに余裕アルな！　この裏切り者ー！」
古八「鉛さんがそんな人だとは、思いませんでしたよ。正直言って見損ないましたよ！」
軽蔑した目で二人が鉛時を、見つめる。
鉛時「おいおい、待てって。お前ら、何言っちゃってんの？　それって、もはや『鉛魂』の話でもなんでもないじゃん。中の人の話だよね？それに、お前らだって他の作品に出てるじゃねーかよ。いい加減にしろよな」
榊楽「声優は数をこなしてなんぼの世界なんじゃ、コラ！　『鉛魂』みたいな長い作品はそうはないアルね！」
古八「そうですよ。鉛さん、あなたも主役なんだったら、なんとか引き伸ばし工作でもなんでもやってくださいよ！」
無茶をいう突っ込み眼鏡である。
鉛時「ああ？俺にどうしろと？　中の人がアニメ制作会社に・・・・・・言っても無駄だな。もっと上の方に言わねーと。・・・・・って、声優一人の力で番組をどうにかできるかよ！！」
そういうと、逃げるように鉛時は万事屋を出て行こうとする。
榊楽「どこ行くつもりアルか、鉛ちゃん？」
鉛時「ああ、この後長谷皮さんと約束があってな」
古八「・・・パチンコですね？」
榊楽「パチンコするくらいなら、さっさと給料よこせアル！　行け、貞春！」
貞春（榊楽の飼っているデカい犬神である）が鉛時にかぶりつく。
鉛時「うぎゃあああああ！！！！」

榊楽「貞春。鉛ちゃん食って腹壊すなアルね！」
鉛時「あのー、榊楽さん？　貞春君、超痛いんですけどー？　血がだらだら出てるんですけどー？　」
無視する榊楽。
ばたりと倒れる、主人公の板田鉛時。その上にダイブする、貞春。
鉛時「・・・・・・・・・・」
榊楽「これにて、鉛魂は終了アルか！　・・・・・・ま、そのうち再開するかもアルな。な、貞春？」
貞春「くう～ん！」（下敷きの鉛時、完全にノックアウトである）
古八「・・・・・・って、こんな終わり方、あるかあーー！」

（無慈悲に終わる！）

（２０１２年３月２６日月曜日、番組一時終了・・・多分。）